18. 膵シンチ所見（1）濃染膵

○桜井　邦輝　　木戸長一郎　　松尾　　孝
三原　　修
（愛知県がんセンター・放）

^{75}Se セレノメチオニンを用いた膵シンチグラムで，膵頭体部が，肝の最濃染部と同等か，それ以上に濃染している場合に，その膵を濃染膵とした．1970～74年の5年間に施行した1104例中の膵シンチ症例のうち，濃染膵は31例に見られた．

濃染膵31例の内訳は，膵炎16例，膵炎の疑いがあっても生化学的検査による肯定が得られなかった症例5例，慢性肝炎および肝硬変により相対的に膵が濃染して見える症例6例，多発性肝転移癌1例，ファーター氏乳頭部癌（膵内膵液貯溜によるか）1例，未調査2例であった．

濃染膵を認めた場合，肝疾患より，膵炎を最初に疑うべきである．

19. 膵シンチ所見（2）無描出膵

○桜井　邦輝　　木戸長一郎　　松尾　　孝
三原　　修
（愛知県がんセンター・放）

^{75}Se セレノメチオニンを用いた膵シンチグラムで，膵の描出が淡すぎて，バックから識別できぬ症例を無描出膵の症例とした．1970～74年の5年間に施行した1104例中の膵シンチのうち27例は無描出膵であった．

無描出膵27例の内訳は，膵炎11例，膵炎の疑い1例，膵頭部癌6例，未期癌症6例，隣接癌の直接浸潤1例，未調査2例であった．

無描出膵で黄疸を伴う症例は10例あり，6例は膵頭部癌であった．

肝内胆道様欠損像は9例に見られ膵頭部癌4例，膵炎5例に見られ，必ずしも膵癌に特有な像ではない．

癌症例末期に見られた無描出膵6例は，膵の酵素合成能の低下によるのかも知れない．原発不明癌の症例では，しばしば膵原発と誤診される．

20. ^{131}I adosterol による副腎スキャンの臨床経験

○綾川　良雄　　佐久間貞行　　今葷倍庸行
石垣　武男　　鎌田　憲子　　水谷　弘和
高橋　正樹
（名市大・放）
柴田　靖彦　　藤田　卓造　　加藤　英雄
（同　RI）
青木　久三　　吉田　　正
（同　2内）
永井　良治　　片岡　　誠　　小林　俊久
（同　2外）

新しく開発された ^{131}I-Adosterol（DRI研究所）を用いた副腎スキャンを11名に施行し，若干の検討を加えた．方法はルゴールによる甲状腺ブロック後，^{131}I-Adosterol を 20 μCi/kg 静注し，4—6—8—12日目に副腎スキャンを施行した．さらに血中，糞便中，尿中の activity を経時的に検討し，その推移と推定全身被曝量を得た．対象の内訳は，原発性アルドステロン症4名（2名は手術的に adenoma と確診），クッシング症候群2名（1名は手術的に hyperplasia と確診），特発性アルドステロン症1名，腎性高血症1名，副腎外性褐色細胞腫1名，正常者1名，その他1名である．

結果：5名の血中の activity の推移から平均の血中クリアランス T1/2 は 0.6 日である．平均の尿中，糞便中排泄率は第1日目4.5%，16%，total 20.5%と糞便中に高く，尿中はその約1/3で，以後同様の傾向を示した．これは ^{131}I-19-コレステロールの尿中排泄率が高く，糞便排泄率が低いのと異なり，さらに total の排泄率も低いことがわかった．有効半減期は平均2.8日であった．MIRD 法を用いた推定全身被曝は 1.23 rad/mCi/70 kg であった．この核種を用いると体内残存が高く，肝，副腎への移行率が高い．肝負には便中移行が高いことが従来の ^{131}I-19-コレステロールによる

Presented by Medical*Online